石器のマテリアリティ

——西アジア新石器時代における黒曜石の意味と役割について——

Materiality of Chipped Stone: The Meaning and the
Role of Obsidian in the Neolithic Near East前田 修^{*}
MAEDA Osamu

ABSTRACT A theoretical reasoning that employs the concept of ‘materiality’ explains that materials are always meaningfully constituted and play an active role in mediating our understanding of society. Since we usually understand the structure of society through our experience of day-to-day social activities, which usually involve engagements with materials, our recognition of society is often achieved with reference to the meaningful materials involved in this social experience. However, the meaning of materials does not intrinsically reside in materials *per se* but is arbitrary given as they are engaged with by us in this very process and may vary according to the context of engagements. This idea suggests that in order to understand the social significance of past material culture to the fullest possible extent archaeologists must pay more attention to the way in which material artefacts were engaged with by past people rather than to the physical and typological features of artefacts.

From this perspective this paper investigates the social meaning of obsidian artefacts and their role in mediating people’s recognition of social relationships between Neolithic communities, particularly focusing on the exchange of obsidian and its use for the production of stone tools at the sites of Tell el-Kerkh and Akarçay Tepe in the north Levant. It is assumed that for the people at these sites obsidian used for stone tools, such as side-blow blade-flakes, corner-thinned blades and projectile points, was the meaningful material that embodied the social relationships with their exchange partners of obsidian, and then such meaningful obsidian in turn served as an active medium in enhancing and maintaining those social relationships. Studying the social relationships in such a way enables us to understand the cultural affinities between Neolithic communities in a different way from

^{*} マンチェスター大学大学院芸術・歴史・文化科学研究科博士課程
Ph. D. Student, School of Arts, Histories and Cultures, University of Manchester

a conventional approach, which has often overemphasised typology of chipped stone artefacts.

はじめに

物質文化とは、様々な人間活動の産物であり、遺物や遺構として残される過去の物質文化には当時の人々の生活が直接に反映されている、というのが考古学における物質文化の一般的な理解であろう。そのため、西アジアをはじめとする世界各地の考古学研究の場において、より多くの考古資料を収集し、可能な限り精確に分析することが、より客観的な過去の復元に近づく手段であると考えられてきた (e.g. Trigger 1989)。しかしながらこの十数年の間に、このような物質文化の捉え方に疑問を呈する議論がイギリスや北欧の研究者を中心に盛んになっている (c.f. Thomas 2000, Hodder 2001)。文化人類学や社会学の潮流と協調したこの動きは (e.g. Tilley et al. 2006)、デカルト以来の近代合理主義思考への批判の一つと位置づけられるが (Thomas 2004)、なかでも、「マテリアリティ」の概念を用い、物質文化における物質の意味と役割とは何かを根本的に問い直す試みには、これまでにない斬新な視点から過去を理解しようとする姿勢が表れている (e.g. Tilley 2004, Ingold 2007)。このような議論は西アジアをフィールドとする研究者の間では未だ十分に理解されているとは言い難いが (限られた研究例としては、Hodder and Cessford 2004, Croucher 2005, Meskell 2008 など)、新たな観点から過去の物質文化を捉え直す理論は、西アジア考古学にとっても十分に魅力的である。そこで本稿は、マテリアリティの概念を用いて物質文化を研究することで、西アジア新石器時代社会の一側面を従来とは異なる切り口で理解することを試みる。物質文化全般に通じる議論ではあるが、その一例として黒曜石の交易と黒曜石製石器の製作を例に取り、新石器時代の黒曜石が社会的な意味を持った物質であったことを主張するとともに、そのような物質の利用を通して集落間の社会関係が再生産された様相を考察する。以下では、前半部分でマテリアリティの概念について理論的な概説をおこない、後半部分で、テル・エル・ケルクとアカルチャイ・テペの2遺跡で利用された黒曜石の意味と役割について検討する。最後に、そこから導かれる解釈として、新石器時代における集落間の文化的な繋がりについて展望を述べる。

I. マテリアリティの概念

1. 解釈される存在物

マテリアリティという用語は、研究者によって異なる意味に用いられることがあるが (Jones 2004, Thomas 2005), ここでは現象学的な考えにもとづいた、物質の存在と認識についての概念を指す用語として用いる。例えば、ここに黒曜石製の石器が「ある」というとき、私たちは「黒曜石」という材質や「石器」としての形状を認識することでその物質の存在を確認している。しかし、現象学的な存在論によれば、私たちは目の前に存在する物質をありのままに認識しているのではなく、その物質が何であるかを主観的に解釈し、そこに意味を見いだすことで初めてその物質の存在を捉えているのだと説明される (Gosden 1994, Tilley 1994, Thomas 1996⁽¹⁾)。言い換えれば、あらゆる物質は、私たちに解釈されることで初めて「ある物質」として存在し得るものであって、普遍的かつ客観的に存在する物質の生の姿を認識することはできないというのである。私たちは、多くの場合は無意識の内に、「黒曜石という岩石」あるいは「石器という道具」といったように、何らかの意味を与えて解釈することで黒曜石製石器の存在を主観的に認識しているわけだ。それでは黒く光る物体としての黒曜石の素性こそは、私たちの主観に左右されることなく存在する物質のありのままの姿ではないかという疑問が持たれようが、「黒い」、「光る」あるいは「物体」という概念さえも、結局は人間による解釈の一つに過ぎないのである。普段私たちが普遍的な存在として捉えている、形状、色、材質、さらにはそれを構成する元素や素粒子、あるいはその構造といった物質の物理的特性は、その物質自体に生来的に兼ね備わったものではなく、私たちが物質の存在を解釈するための概念の一つに過ぎないわけである。

それでは、なぜ普段の私たちは物質の存在を普遍的なものと捉え、物質には誰もが共有できる客観的な属性があると考えているのか。それは、私たちが日々のコミュニケーションの中で互いの主観的な解釈を確かめ合い、共通の認識と理解を得るに至っているためである。会話のように直接的であれ、メディアを通じた間接的なものであれ、あらゆる物質に対する私たちの認識は常に他人とのコミュニケーションを通じた相互の理解の中でおこり、私たちは互いの認識のズレを常に修正しながら物質の存在を再認識しているのだ。この考えは、テ

クストの意味の生成を例にあげると理解しやすい (Shanks & Tilley 1992, Thomas 1996)。いかなるテキストも本来的な意味を備えているものではなく、それぞれのテキストに唯一の正しい意味というものは存在しない。テキストは、ある文脈の中でそれを用いたコミュニケーションが書き手と読者の間に成立することで初めて意味を持つようになる。すなわち、テキストは常に多義であり、あるテキストの意味は、読者がそれをいかに解釈するかに応じて変化し、その意味はテキストの書き手にすら定かではないといえる。同様に、いかなる物質の意味も不変ではなく、あいまいで多義的である。普段の私たちは、それぞれによる物質の認識の仕方がお互いの意志の疎通を妨げない限りにおいて、それがその物質の正しい認識の仕方だと理解しているに過ぎず、コミュニケーションが成り立っている社会の内部においてのみ、本来は個人的な主観に拠っている物質の認識が共有され、その存在が普遍的で客観的であるように思われているのだ。私たちは、それぞれが一同に確かな物質存在に対峙しているのではなく、それぞれの主観的な認識が共有されたところに確かな物質存在を見出しているのである。

このことは、物質の存在の仕方は、社会や文化によって異なることを意味する。日常的にコミュニケーションが図られる社会の内部においては共有される物質の認識が、他の社会や文化においても常に同じであるとは限らないわけだ。

2. 考古学研究における物質の意味の解釈

この考え方が考古学において重要なのは、コミュニケーションの成り立たない過去と現代の社会の間では、ある物質の存在が同じように認識されていたのかどうかを知る由はないという事実を私たちに突きつけるためだ。過去の物質文化が、現代の私たちにそう見えるのと同じように「存在」していたのかどうかは決してわからないのであり、現代の私たちの常識的な認識のみに頼って過去の物質文化を理解するわけにはいかないのである。したがって、私たちが過去の物質文化を理解するためには、過去の人々が物質の存在をどう解釈したのか、それを現代の私たちが解釈するという、二重の解釈が必要となる (Shanks & Tilley 1992)。これは、物質自体は過去から現在まで同じように存在するが、それをどう解釈するかは過去と現在では異なり得るということではなく、過去における物質の存在そのものが、過去の人々による解釈によって決定している

ということである。そのため、過去の物質文化を研究するにあたって、まずは基礎として遺物の物理的特徴をしっかりと把握し、その上でその遺物の意味を解釈するという、従来の研究において一般的な二段階の構造が成り立たないことを意味する。形、色、重さ、成分といった、普段私たちが「基礎的な事実」と考えている遺物の属性も、現代の私たちによる解釈の一つに過ぎず、過去の人々は、私たちと同じようにその遺物を理解していたのかも知れないし、そうではないかも知れないわけだ。このように考えるならば、考古学において過去の物質文化を可能な限り客観的に復元しようと努めることは無意味なことであるといえる。私たちは、過去の人々にとってその物質がどのように存在したのかを、初めから積極的に解釈しなければならないのだ (e.g. Hodder 1999)。

それでは、私たちはどのような方法で過去の物質文化を解釈すべきなのか。物質の存在は人間が意味を与えて解釈することで認識されると述べたが、ある物質の意味は、その物質が置かれた状況においてその他の物質や人間との関わりの中で生み出されるものであり、それは日々の生活において人間が様々な物事と関わる中で実現するものである。物質に先天的な意味がないのであれば、私たちはそれを純粋な知識のみによって理解することはできない。テキストの意味が、読者による読むという行為の中で生まれるように、物質の意味もまた、人間が物質と関わる経験の中で顕わになるのである。ただしこの意味は、私たちの完全に自由な意思によって主体的に与えられるものではないことに注意せねばならない。なぜならば、物質と同様に私たち自身の存在もまた、自身を取り巻く他の人々や物質との関係の中で解釈されることで初めて認識されるものであり、私たち自身の存在は物質の存在に先立つものではないためである。物質は私たちによって解釈されることで存在物となるが、それを解釈する自己の存在もまた、物質との関わりの中で解釈されなければならないのである。⁽²⁾したがって物質の存在と自己の存在は常に同時に認識されるものであり、相互に依存したものであるということになる (Thomas 1996)。物質の意味は、物質自体に備わったものでも、私たちによって一方的に与えられるものでもなく、ある状況の中で私たちが物質と関わることによって生じ、多くの場合は無意識のうちに認識されるものなのだ。

したがって考古学では、過去の人々がいかに物質と関わり合ったのかに注目することで、過去の人々にとっての物質の意味を解釈するという作業が必要に

なる。同じ材質で作られ、同じ型式で、同じ機能を持った遺物であっても、人々による関わり方が異なればその解釈のされ方は異なり、根本的に異なる物質としてその存在が認識され得るのであり、逆に異なるタイプの遺物が、状況によっては同じものとして存在し得るのである。⁽³⁾

3. 物質が果たす積極的な役割

このような存在論の概念は、人々が社会を理解する上で物質が積極的な役割を果たすことを説明する。物質存在や私たち自身の存在と同様に、社会にもまた、本質的な事実というものは存在しない。社会的事実はずべて、私たちの解釈によって意味が与えられ、それが社会の成員に共有されることによって存在しているのだといえる。確かな社会構造というものが先天的に存在しており、それが私たちによって認識されるのではなく、私たちの認識が共有されたものが社会構造として存在していると理解されているわけだ。⁽⁴⁾しかし、このような社会の認識もやはり、私たち個人の完全に自由な意志によって決定されるのではなく、日々の生活において私たちを取り巻く物事との関わりの中で生じるものである。そして物質文化はそのような状況を構成する大きな要素であるゆえ、社会の認識には人と物との関わり方が大きく影響しているわけだ (e.g. Barrett 1988, 2001)。社会との関わりの中で物質に意味が与えられ、その存在が認識されるのと同時に、意味に満ちた物質との関わりの中で社会が解釈され、存在するのである。物質、自己、社会は、それぞれが互いの存在の一部を形成するものであり、それゆえ物質は、私たちが社会を理解する上での物的媒体として重要な役割を果たすのである。

II. 西アジア新石器時代の黒曜石利用

それでは次に、このようなマテリアリティの概念を踏まえた上で、実際の考古資料の検討をおこないたい。ここでは、北西シリア、エル・ルージュ盆地のテル・エル・ケルク、ユーフラテス河中流域のアカルチャイ・テペ (図1) で利用された黒曜石製石器である、サイド＝ブロー・ブレイド＝フレイク、CT 石刃、尖頭器について考察する。

図1 テル・エル・ケルクとアカルチャイ・テペの位置および図3, 7, 9
中で示した遺跡の名称

(1. シルロカンボス 2. ユムクテペ 3. タルスス 4. サクチュ・ギョズ 5. ジュダイダ 6. パフ
エルテ 7. ラス・シャムラ 8. ケルク 9. クミナス 10. スーカス 11. カラート・ムディーク
12. タバット・アル・ハマーム 13. アルジュネ 14. ネビ・メンド 15. ビブロス 16. ラマド
17. グライフェ 18. アスワド 19. ジャフェール 20. グリティッレ 21. ハヤズ 22. ネヴァル
・チョリ 23. クマルテペ 24. テレイラット 25. アカルチャイ 26. ハルーラ 27. アブ・フレ
イラ 28. ギュルジュテペ 29. ダミッシリヤ 30. アスアド 31. サビ・アビヤド 32. プレイラ
ト 33. マフラック・スルク 34. クディル1 35. エル・コウム2 36. ウンム・エル・トゥレ
ル 37. エス・シン 38. ブクラス 39. ボイテペ 40. チャヨニュ 41. ディヤルバクル周辺遺跡
42. ハケミ・ウセ 43. サラット・ジャーミー・ヤヌ 44. ハネケ 45. ラヘケ 46. シャガル・バ
ザル 47. カシュカシヨクII 48. セクル・アル・アヘイマル 49. ギニッグ 50. マグザリヤ
51. サラサートII 52. キュルテペ 53. ジガン 54. アリ・アガ 55. ハッスーナ 56. ウンム・
エ・ディアッパ 57. ウンム・ダバギーヤ 58. ハッジ・フィルツ 59. マタッラ 60. ジャルモ
61. タメルハーン)

1. サイド＝ブロウ・ブレイド＝フレイクとCT石刃

サイド＝ブロウ・ブレイド＝フレイク（以下サイド・ブロウと略）とは、土
器新石器時代に特徴的に見られる小形の黒曜石製石器である（図2）。筑波大
学シリア考古学調査団が1990年代より調査を進めている先土器新石器時代B期
から土器新石器時代の集落であるテル・エル・ケルク（Tsuneki et al. 1998,
1999, 2000, Iwasaki & Tsuneki 2003）では、ルージュ 2c 期（土器新石器時代
中葉）の層から多くの資料が出土した。この石器の機能については未だ明らか

図2 テル・エル・ケルク（ルージュ2c期）から出土したサイド＝ブロー・ブレイド＝フレイク（1-8）とサイド・ブロー石核（9-11）

ではないのだが、ケルクでこの石器が製作された状況を黒曜石交易との関連において検討することで、その意味と役割を探ることができる。

特異な形状をしたこの石器の概要については、松谷（1974, 1981）および西秋（1996）によって既に詳細な研究結果が示されているのでここでの反復は避けるが、黒曜石交易との関わりにおいて特に重要となるのは、その地理的分布である（図3）。北メソポタミア、南東アナトリア、ザグロス西麓の遺跡における出土例が多いのだが、これらは東アナトリア産黒曜石が排他的に流通した地域であり、サイド・ブローの分布には東アナトリア産黒曜石交易との関連が

見られる (Nishiaki 1993)。北レヴァントで稀に出土する資料が東アナトリア産黒曜石で作られていることも、これを裏付けている (Copeland 1981)。ただしこれは、この石器の完成品がその他の東アナトリア産黒曜石とともに交易されたということではないようだ。サイド・ブローは黒曜石製石刃の端部への打撃によって連続して作出されるのだが (図 4)、それぞれの遺跡でサイド・ブローと共に、サイド・ブローの剥離痕を持つ石刃 (サイド・ブロー石核) が出土することが多い。交易によって入手した東アナトリア産黒曜石を用いて、集落ごとにこの石器が製作されたことが窺われる (Nishiaki 1993)。

この傾向は、ケルク出土資料からも確かめられる。蛍光 X 線分析による産地⁽⁵⁾同定をおこなった計 82 点の資料のうち、サイド・ブローの 97.8%、サイド・ブロー石核⁽⁶⁾の 83.8% が東アナトリア産である (図 5)。また、サイド・ブロー石核が出土していることに加え、ケルクのサイド・ブローの中では北メソポタミアで出土する資料に比べ小さめのものが多いという地域的特徴が見られる。このことから、ケルクでも他の遺跡と同様に、交易品である東アナトリア産黒曜石を用い集落内でサイド・ブローが製作されたものと考えられる。

ところが北レヴァントに位置するケルクの場合には、この時期に利用された黒曜石全体の中で東アナトリア産黒曜石の割合は極めて小さいという事実に注目せねばならない。西アジアの新石器時代に利用された黒曜石の産地はアナトリア高原の 2 地域、カッパドキア地方と東アナトリア地方に大別され、レヴァント、メソポタミア方面への黒曜石の流通は大きく東西 2 つの交易圏に分かれることが知られている (e.g. Cauvin et al. 1998, Chataigner 1998)。新石器時代には、カッパドキア産黒曜石はおもにレヴァントに、東アナトリア産はメソポタミア、イラン西部を中心に広がり、後者は少量がレヴァントにも運ばれたため、レヴァント側では 2 つの流通圏が重なる地域を形成している (図 3)。この傾向に違わず、ケルク出土黒曜石の産地分析結果を見ると、この時期の黒曜石全体の 81.6% をカッパドキア産が占め、残りの 20% 弱が東アナトリア産となっている。サイド・ブローの素材となる黒曜石製石刃に限って見ても、前者の割合が 76.3% と圧倒的に大きい⁽⁷⁾ (図 5)。したがってケルクでは、カッパドキア産黒曜石の石刃が豊富に存在する中で、数少ない東アナトリア産黒曜石の石刃がわざわざ選ばれてサイド・ブローが作られたということになる。その製作技法が東アナトリア産黒曜石の交易とともに伝わったと考えるに疑問はないの

図3 サイド＝ブロー・ブレイド＝フレイクの分布と黒曜石交易圏

図4 サイド＝ブロー・ブレイド＝フレイクの製作工程

だが、東アナトリア産黒曜石の意図的な選択はルージュ 2c 期を通して認められ、交易と石器製作がその後も継続した関連を持っていたことが窺われる。

素材石刃の形状や大きさなど黒曜石の機能的な特徴には東アナトリア産とカッパドキア産で差は見られず、どちらの黒曜石からもサイド・ブローを製作することは可能である。サイド・ブローに好んで用いられた幅 15-25mm の石刃や、断面が三角状を呈する厚めの石刃は両産地の黒曜石に同様に含まれる。したがって、その製作においてカッパドキア産黒曜石を避ける必然性は見あたら

図5 黒曜石製石刃，サイド=ブロー・ブレイド=フレイク，サイド・ブロー石核に占める東アナトリア産黒曜石の割合

ず，わざわざ東アナトリア産の黒曜石が選択された背景には，文化的な理由があったと考えられる。石材としては同じ機能を持った黒曜石でも，ケルクの人々による認識のされ方は同じではなかったようだ。おそらくケルクの人々はサイド・ブローが北メソポタミア，南東アナトリアの石器製作の伝統の一つであることを認識しており，自らの手による同じ石器の製作のために，その地域との交易によって獲得された東アナトリア産黒曜石を意図的に選択したのである。石器利用における自分たちの集団と交易相手の集団の関係性の認識と相まって黒曜石の存在が認識され，同じ石器製作の伝統を持つ集団との交易によって入手された黒曜石は，その集団との共通性を意味する物質として人々に理解されていたと考えることができる。前章で述べたとおり，物質の意味は，人々が様々な物事との関連においてその物質を経験する中で明らかになるものと考えられる。交易と石器製作を通して人々に利用された黒曜石の意味も，それに関わる集団との関係の中で生み出され，理解されたものと解釈できる。黒曜石を利用する背景には，利器としての機能的な需要があることは確かだが，過去における黒曜石の存在を，利器としての一面的な価値だけで判断することはできない。ケルクでサイド・ブローに利用された黒曜石は，自らの石器製作の伝統と，北メソポタミア，南東アナトリアの石器製作の伝統との共通性を表すものであり，その他の黒曜石とは異なる意味を持っていたと考えられるのである。

このような東アナトリア産黒曜石の意図的な選択は，アカルチャイの土器新石器時代における CT 石刃 (corner-thinned blades：図6) の利用にも認められ

る。イスタンブール大学の主導で調査がおこなわれているこの遺跡は、ケルクとほぼ同時期の先土器新石器時代B期から土器新石器時代にかけて居住された (Arimura et al. 2000, Balkan-Atli et al. 2004)。CT 石刃は、長さ30-50 mm 程に折り取られた黒曜石の石刃の四隅に、背面あるいは腹面に沿って薄い剥離を施した石刃である (Nishiaki 1990)。常に黒曜石で作られ、フリント製は知られていない。湾曲鎌の刃として、曲がった柄に隣り合わせて連続して装着するために、重なり合う石刃の角部を薄くしたものとの見解もあるが (Nishiaki 1990)、この石器の確かな機能は明らかではない。その製作にあたっては、背面の四隅、腹面の四隅合わせて8カ所の角部にリタッチを入れることが可能なわけだが (図6)、アカルチャイの資料には、リタッチの施される角部の位置に決まったパターンが見られず、背面にリタッチが施される例が極めて少ない。これは、背腹両面の対角線上の角部にリタッチが施されることの多いテル・カシュカシヨクⅡ号丘の例とは異なり、バリフ川流域の遺跡で見られる資料と類似していることから、いわゆるバリフ・タイプであると考えられる (Nishiaki 2008)。ただし、アカルチャイのCT 石刃には端部に打面と打瘤の残る石刃を素材にしているものが含まれ (図6: 7, 8)、バリフ・タイプとの細かな違いが見られることから、これらは輸入品ではなく集落内で製作されたものと考えられる。

CT 石刃の地理的な分布を見ると、サイド・ブロウの場合と同様に、東アナトリア産黒曜石が排他的に流通した北メソポタミアを中心に分布することが知られている (図7)。アカルチャイ出土のCT 石刃を見ても、その色調から判断して東アナトリア産と考えられる黒曜石で作られているものが多い⁽⁸⁾ (Maeda 2007)。ところが、ユーフラテス河中流に位置するこの遺跡の黒曜石全体の中では、両産地の黒曜石が利用されたことが産地同定の結果および色調の分析から確かめられており、この遺跡でCT 石刃が製作されるにあたって、東アナトリア産黒曜石が意図的に選択された様子が窺われる。素材となる黒曜石製石刃の大きさや形状には産地間の差は全く見られないのだが、通常の石刃およびCT 石刃に占める各黒曜石産地の割合を見ると、通常の石刃では、確実に東アナトリア産といえる黒曜石の割合が41.1%であるのに対し、CT 石刃では75.0%と大きくなっている。この遺跡ではケルクに比べ、黒曜石全体に占める東アナトリア産の割合が元々大きいものの、この割合の差は、⁽⁹⁾アカルチャイにおけるCT 石刃の製作においても、機能的な必然性のないところで東アナトリア産

図6 アカルチャイ・テペ土器新石器時代層から出土したCT石刃
 1, 2, 4, 6, 7, 10 : Phase II, 3, 5, 8, 9, 11 : Phase III

図7 CT石刃の分布と黒曜石交易圏

の黒曜石がわざわざ選択されたことを示しているといえよう。ケルクのサイド・ブロー同様、アカルチャイのCT石刃製作においても、同じ石器製作の伝統をもつ北メソポタミアの交易相手から入手された東アナトリア産の黒曜石は特別な意味を持っていたようだ。この状況で利用される東アナトリア産の黒曜石は、単なる石材ではなく、石器製作の伝統における集落間の共通性を意味するものとして、カッパドキア産の黒曜石とは異なる意味を持っていたのだ。

このように、ケルクのサイド・ブローとアカルチャイのCT石刃はどちらも、石器利用における集落間の関係が埋め込まれた物質であったと考えられるのだが、さらに、このような意味を持った黒曜石を繰り返し利用することによって、集落間の関係がより明確に人々に再認識されたと考えることができる。既に述べたように、集落間の社会関係は先天的な社会構造としてあるものではなく、人々が自集団と他集団の関係を様々な経験を通して理解する中で築かれるものである。そしてその経験は、人々が様々な物質文化と関わる中で実践されるわけだが、物質、自己、社会は根本的にその存在をお互いに負ったものであるがゆえ、社会関係は常にその実践のコンテクストを構成する物や人との関連の中で理解されるものといえる (c.f. Gosden 1994)。新石器時代における黒曜石の利用もその一例といえ、黒曜石の在り方が、人々による社会関係の認識に影響

を与えたものと考えることができる。この過程において、黒曜石の意味、交易相手との社会関係、それを認識する人々は相互に依存した存在であり、それゆえに、集落間に見られる石器利用の共通性や差異を体現する黒曜石の利用を通して、自らの集団と他集団の文化的な相違が繰り返し認識されたと考えられるのである。⁽¹⁰⁾ サイド・ブロウとCT石刃の利用は、一方では東アナトリア産黒曜石の交易相手である北メソポタミア、南東アナトリアの集落との共通性を顕わにし、他方ではそれらの集落とカッパドキア産黒曜石の交易相手である北レヴァントの集落との違いを浮き彫りにしたものと考えられる。

このような黒曜石の意味と役割は、交易による繋がりや、同型式の石器の利用、あるいは両者の組み合わせによって単純に決定されるものではない。サイド・ブロウやCT石刃に用いられた黒曜石は、意図的な選択という関わり方をされる中で意味を持ち、集落間の社会関係を築く働きを担ったと考えられる。ケルクのサイド・ブロウとアカルチャイのCT石刃は異なるタイプの石器であるが、人々による関わり方が類似しているために、集落間関係の再生産において同様の役割を果たすものであったのだ。

2. 尖頭器

黒曜石の意味と役割は、ケルクとアカルチャイでそれぞれ利用された黒曜石製の尖頭器にも見ることができる。ケルクではルージュ1期（先土器新石器時代B後期）からルージュ2c期までの層で、アカルチャイでは先土器新石器時代B中期から後期の層で、ナヴィフォーム型石核から剥離された肉厚で先端の尖った石刃を素材に作られた大型の黒曜石製尖頭器が出土している（図8）。完形品は少ないものの、従来の型式分類ではビブロス型、ウガリット型、アムーク型と呼ばれる尖頭器（Contenson 1992, Gopher 1994）である。ただし、両遺跡ともに黒曜石製尖頭器あるいはその素材であるナヴィフォーム石刃が集落内で製作された痕跡はなく、尖頭器の完成品が交易によって持ち込まれたものと考えられる。⁽¹¹⁾ これらの尖頭器はすべて透明度の高い灰色を呈し、カッパドキア産と思われる黒曜石で作られているが、⁽¹²⁾ 同じタイプの黒曜石製尖頭器は、この時期にカッパドキア産黒曜石が頻繁に利用された北レヴァントの遺跡で多く知られており（図9）、ケルクとアカルチャイの尖頭器も、この地域の集落との交易によって入手されたものである可能性が高い。

図8 テル・エル・ケルク (1-5) およびアカルチャイ・テペ (6-8) から出土した黒曜石製尖頭器

1: ルージュ 1 期, 4: ルージュ 2b 期, 2, 3, 5: ルージュ 2c 期, 6, 8: Phase IV, 7: Phase VI

ここで、ケルクとアカルチャイにおける黒曜石交易と石器利用の関連性に着目したいのだが、サイド・ブローやCT 石刃の場合と異なり、黒曜石製尖頭器には集落内での製作が見られないため、石器製作の伝統が交易相手と共有されるような状況を黒曜石製尖頭器の利用のみから考えることはできない。しかしながらこの場合は、集落内で製作されたフリント製尖頭器の利用を合わせて検

討することで、交易相手との社会関係を考えることができる。

フリント製の尖頭器は両遺跡で数多く出土しており（図10）、さらにフリント製のナヴィフォーム石核やナヴィフォーム石刃が多く出土することから、集落内でフリントを用いてナヴィフォーム石刃が製作され、尖頭器に加工されたものと考えられる（Arimura 2003, Borrell forthcoming）。注目すべきは、フリントの尖頭器と黒曜石の尖頭器がどちらも同じタイプのナヴィフォーム石刃を素材とし、同じタイプの二次加工が施され、同じスタイルに仕上げられている点だ。これは、アカルチャイにおける尖頭器の型式変遷を見るとより明らかである。先土器新石器時代B中期から後期初頭にかけては、黒曜石、フリントともに急角度リタッチのみが部分的に施された尖頭器が見られるのに対し（図8：7, 図10：5）、同後期後葉になると、両石材において押圧リタッチが施されるようになり、基部に挟りの入ったいわゆるウガリット型と呼ばれる尖頭器が作られるようになる（図8：6, 8；図10：4, 6）。すなわち、フリントの尖頭器が集落内で作られるのと同時に、それと全く同じタイプの黒曜石の尖頭器が交易によって外部から持ち込まれていたわけである。出土状況から判断すると、フリントと黒曜石の尖頭器の利用状況に大きな隔たりはないと考えられ、ケルクとアカルチャイの人々は日常生活の中でフリント製尖頭器と黒曜石製尖頭器をともに扱い、比較し、それらが同じ製作技法で同じスタイルに仕上げられたものであることを認識できたと考えられる。つまり、自らが持つ尖頭器製作の伝統と、交易相手のそれとが同じであることが繰り返し認識されていたと考えることができるだろう。このような状況の中で、黒曜石製尖頭器は石器製作の伝統における交易相手との共通性を意味する物質として人々に認識されたと考えることができ、それと同時に、意味に満ちた尖頭器の利用を通して、北レヴァントの交易相手との繋がりが人々に再認識されたと解釈できるのである。

このような集落間の関係は、集落間に見られる同型式の尖頭器の利用から単純に推測されるものではなく、フリント製尖頭器との比較の中で生まれる黒曜石製尖頭器の意味と役割を踏まえた上でこそ解釈可能なものである。このことは、ケルクにおける尖頭器利用の時間的変化を考える際に重要である。ケルクでは、ルージュ1期から2b期にかけて継続していたフリント製尖頭器の集落内での製作がルージュ2c期には見られなくなり、それに伴い黒曜石製尖頭器の意味と役割も変化したと考えられる。この時期にも、先行する時期と同様に

図9 ナヴィフォーム石刃を素材とする尖頭器の分布とカッパドキア産黒曜石の交易圏（先土器新石器時代B後期から土器新石器時代の北レヴァント，北メソポタミア，南東アナトリアの遺跡に限定）

黒曜石製およびフリント製の尖頭器が共に利用されるのだが，フリント製のナヴィフォーム型石核は見られなくなり，尖頭器の素材となる大型石刃製作の痕跡は見られなくなってしまう⁽¹³⁾。すなわち，ルージュ 2c 期には，両石材の尖頭器がどちらも交易によって獲得されるようになったと考えられ，このような状況では，尖頭器の利用を通して自分たちの石器製作の伝統と交易相手のそれとの共通性が顕在化されることがなくなったと考えられるのだ。黒曜石製尖頭器の利用に変化は見られないのだが，この時期にはフリント製尖頭器の製作が行われなくなったために，人々が黒曜石製尖頭器と関わるコンテクストに変化が生じ，それに応じてその意味と役割も変化したのだといえる。

III. 新石器時代における文化圏の理解

以上，交易と石器利用のコンテクストにおいて，ケルクとアカルチャイの人々にとって黒曜石がどのような意味と役割を持った物質であったのか解釈を試みた。現段階で正確な交易ルートや交易相手进行を特定するのは難しいが，大局的に見れば，このように利用された黒曜石は，一方では北レヴァント，他方では北

メソポタミアおよび南東アナトリアの集落との社会関係が埋め込まれた、社会的意味を持った物質であったと解釈できる。⁽¹⁴⁾さらにそのような黒曜石は、単に既存の社会関係を反映するものにとどまらず、その利用を通して人々が社会関係を再構築する過程において、物的媒体として主体的な役割を果たすものであったといえる。つまり、ケルクとアカルチャイにおける黒曜石利用は、集落間の社会関係に応じて黒曜石の意味が生まれ、それを媒体として社会関係が再生産され、さらにその関係にしたがって黒曜石の意味が再認識されるというサイクルであった。

このようなアプローチにもとづいた新石器時代の石器利用と集落間関係の理解は、従来の石器研究によるそれとは異なるものとなる。物質文化の意味と役割は、前述のようなサイクルの中で人間が物質文化と関わり続けることで維持されるものである。関わり方の状況が変われば、まったく同じタイプの遺物でも、その意味と役割は異なるものとなり得る。したがって黒曜石の利用を通して形成される集落間の関係も、黒曜石がどのような状況でどのように利用されたかに左右されるものであり、従来のように石器型式や黒曜石の交易圏、あるいはその組み合わせといった形式的なデータのみによって想定されてきた集落間の文化的関係の理解には再考がせまれる。

例えば、サイド・ブロウとCT石刃の利用において、黒曜石の交易圏とこれらの石器の分布圏を重ね合わせることで、その地域内の文化的繋がりを単純に論じることはできない。確かにこれらの石器の利用には、汎地域的に共通して、東アナトリア産黒曜石の利用と同型式の石器の製作が見られる。このことから、サイド・ブロウやCT石刃の分布は、フリント製石器の製作技術や型式によって定義される地域的な文化圏を横断する、黒曜石製石器利用の文化的広がりを表すものと主張されている (Copeland 1981, Nishiaki 1993)。しかしながら、東アナトリア産黒曜石利用の背景を考えると、これらの黒曜石製石器の広がりを単純に集落間の文化的繋がりとして理解することはできない。北メソポタミア・南東アナトリアは東アナトリア産の黒曜石が排他的に流通していた地域であり、サイド・ブロウやCT石刃を製作するにあたりこれらの地域で東アナトリア産黒曜石が用いられたのは当然のことであった。それに対して、カッパドキア産の黒曜石の流通量が多かった北レヴァントにおいては、サイド・ブロウやCT石刃の製作に東アナトリア産の黒曜石が意図的に選択された。そのため、

図10 テル・エル・ケルク (1-3) およびアカルチャイ・テペ (4-6)
から出土したフリント製尖頭器

1：ルージュ 1 期，2：ルージュ 2b 期，3：ルージュ 2c 期 (Tsuneki et al. 1998, 1999)，
4，6：Phase IV，5：Phase VI (Arimura et al. 2000, Borrell forthcoming)

北レヴァントの集落では、これらの石器の利用を通して北メソポタミア・南東アナトリアの集落と北レヴァントの他集落との関係の違いが明確に対比され、前者との文化的な関係がより強く意識された（あるいは意識されることで維持された）ものと考えられる。一方で、東アナトリア産黒曜石を利用するのが当たり前であった北メソポタミア・南東アナトリアの集落では、むしろこのような文化的繋がり認識は希薄であった（あるいは意識される必要のない当たり

前のものであった)可能性がある。同じ東アナトリア産黒曜石を用い、同じようにサイド・ブローやCT石刃を製作していても、北レヴァントの集落と北メソポタミア・南東アナトリアの集落ではこれらの石器利用を共有する他集落との繋がりが同じように認識されたとは限らないのである。したがって同じ産地の黒曜石や同じ型式の石器が利用される地理的範囲をもって黒曜石利用に見られる文化的な繋がりを一律に想定することはできないということになる。

また、ケルクの例に見られるように、同じタイプの尖頭器が継続して利用されていても、その利用を通して認識される他集落との関係は時期によって異なり得る。黒曜石製尖頭器の物理的な特徴だけを見れば、先行する時期と同様にカッパドキア産黒曜石で作られた同じ型式の尖頭器が引き続き利用されているわけだが、ケルクの人々にとってその意味と役割には変化が生じ、他集落との文化的繋がりの理解のされ方も変化していると考えられるのである。従来の研究においては、同型式の尖頭器の地理的、時間的分布が文化の広がりを表すと理解されることが多く、例えばビブロス型、アムーク型、イエリコ型といった大型有茎尖頭器がレヴァント、北メソポタミア、南東アナトリアに広範囲に分布することが、先土器新石器時代B文化の広がりを表す指標の一つであると考えられることが少なくない(e.g. Gopher 1994, Cauvin 2000)。あるいは、尖頭器の型式分類に基づいた地域差が、地域的な尖頭器文化圏の違いとして理解されることもある(e.g. Kozłowski 1999)。このような考え方によれば、ケルクの尖頭器は、この遺跡がルージュ1期から2c期まで継続して北西レヴァントの尖頭器文化圏に属していたことを示しているということになる。しかしながら、尖頭器の利用を通して人々に認識される集落間の文化的関係は、その利用のされ方によって異なるものであり、同型式の尖頭器の分布によって定義される文化圏が、実際に当時の人々によって認識された文化的繋がりの範囲を表すとは限らないのである。集落間の文化的繋がりの時間的変遷を理解するためには、単に石器型式の分布の時期的変遷に注目するだけでは不十分なのだ。

もちろん実際には集落間の社会関係は複数の要素の総体として築かれるものであり、ここでの例は集落間の文化的繋がりの一側面を示しているに過ぎない。また、例えばケルクではサイド・ブローの製作を通して北メソポタミアや南東アナトリアの集落との共通性が認識される反面、尖頭器の利用を通して北レヴァントの交易相手との共通性が認識されるといったように、社会関係の認識は

重層的で、単純な石器の共通性や差異のみに還元できるものではない。したがって、黒曜石の研究から集落間の社会関係を定義し、文化圏として地図上に示すことは不可能であるし、筆者自身がそれを目指すものでもない。しかしながら、このように黒曜石を例に取ってその意味と役割を解釈し、当時の人々がどのように集落間の文化的繋がりを理解していたのかを考えることで、石器型式のような遺物の物理的特徴や、黒曜石交易圏のような様な地域区分だけからは捉えきれない集落間の関係を解釈することが可能である。これは何も、従来の型式分類や交易圏の同定が無意味だと主張するものではない。現にここでの議論においても、サイド・ブロー、CT 石刃、ウガリット型尖頭器といった型式分類や、カッパドキア産あるいは東アナトリア産黒曜石交易圏といった区分を用いている。しかしながら重要なのは、遺物の型式や交易圏あるいはその組み合わせ自体に普遍的な意味があるのではなく、過去の人々が物質文化と関わる中で型式や交易圏をどのように認識し、意味を見出したのかを、現代の私たちが解釈しなければならないのだということである。物質は常に社会的な存在なのであり、人間と物質との関わり方の中に物質の意味を解釈することなしに、物質文化を通した過去の社会の理解を得ることはできないのである。

おわりに

もちろん、本稿で論じた黒曜石の意味が、新石器時代のケルクとアカルチャイの人々によって認識された唯一の黒曜石の意味であったと主張するつもりはない。黒曜石を始めすべての物質は常に多義的な存在で、時には互いに矛盾する複数の意味を内包するものであり、考古学者が唯一の正解を示すことはできない。このような解釈に対し、結局これは証明不可能な想像に過ぎないではないか、との批判があろう。しかしながら第1章で論じたように、物質や社会は先天的に存在するものではなく、その存在はそれと関わる人々の解釈の上に成り立っているのだということをあらためて主張しておきたい。過去の社会を客観的に復元し証明することは、本来不可能な事である。過去は解釈されるべきものであり、私たちは、様々な過去の解釈を出し合い、それを議論することから多くを学ぶことができるのだ。

注

- (1) 存在論を始め、本稿で扱う社会理論はおもに哲学や現代思想あるいは社会学において議論されてきたものであるが、本稿中ではむしろ考古学研究の中でその概念を解説しているものを参考文献として記した。その理由は、第一に、筆者自身によるこれらの概念の理解が考古学の文献に依っているとこが大きいこと、第二に、本稿の目的は哲学的理論や思想そのものを研究することではなく、それを援用して考古学研究をおこなうことにあるためである。
- (2) 自己言及的なこの存在論は、現象学の用語である「現存在」、「世界内存在」という概念によって説明される。考古学者によるこの概念の詳しい解説については、Gosden 1994, Thomas 1996 を参照。
- (3) 現代の私たちの視点から見て同じタイプの遺物と認識されているものという意。
- (4) このような社会の理解は、シンボリック相互作用論 (e.g. Mead 1934) として古くから知られ、1970年代以降には、社会構造と個人の意志の相互依存の概念を取り入れた構造化理論 (Giddens 1984) あるいは実践理論 (Bourdieu 1977) へと発展する。後述のバレット (Barrett) の論考はこれらの理論を考古学研究に取り入れた先駆的研究例である。
- (5) 分析は沼津高等専門学校の望月明彦氏に依頼し、エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて非破壊分析をおこなった (Maeda 2003)。
- (6) 1997年から2002年の発掘調査で得られたサイド・ブロー77点、サイド・ブロー石核50点のうち、1999年出土資料を除くすべての資料を分析しており、資料の抽出に偏りはない。ここでサイド・ブロー石核に分類されているものの中には、偶発的なサイド・ブロー打撃による割れ口を持つ通常の黒曜石製石刃が数点含まれる可能性がある。サイド・ブロー石核の中で東アナトリア産黒曜石の割合が8割にとどまるのはそのためと思われる。
- (7) 黒曜石製石刃の理化学分析点数はさほど多くないが、全1052点の黒曜石製石刃の色調の観察からも、透明度の高いカッパドキア産黒曜石が大多数を占めることが確認されている。
- (8) 緑系、茶系のトーンを持つものや透明度のない漆黒のものが多い。緑色のものはビンギョルAあるいはネムルート・ダー産、茶色および漆黒のものはビンギョルB産であることが知られている。
- (9) 統計的な重要性はカイ二乗検定によって確かめられている (p 値=0.008)。また、灰色系の黒曜石は色調のみから産地を推定するのが不可能であるため、ここでは東アナトリア産黒曜石に含めていないが、これらの黒曜石も多くが東アナトリア産である可能性は高い。
- (10) 各集落で実際に黒曜石の交易に関わり、石器を製作したのは集落内の一部のグループであろう。しかしながら、その他の人々も黒曜石が利用される状況を見聞きすることで間接的に黒曜石と関わることはできたと考えられる。このような差異はまた、

- 黒曜石利用に直接関わったグループと、そこから除外されたグループの差を明らかにし、集落間のみならず集落内における人々の社会関係をも形成したものと考えられる。
- (11) 完成品の尖頭器ではなくその素材であるナヴィフォーム石刃が交易された可能性も捨てきれないが、どちらの遺跡でも黒曜石製のナヴィフォーム石刃は尖頭器のみに使用されており、ナヴィフォーム石刃が持ち込まれた場合であっても、あくまで尖頭器の素材として交易されたものと考えられる。したがって、いずれの場合においても黒曜石製尖頭器の製作は集落内で完結せず、他の集落が関わるものであったといえる。
- (12) ケルクでは11点の尖頭器が化学分析され、すべてカッパドキア産に同定されている。
- (13) この時期にフリント製のナヴィフォーム石刃が発掘区以外の場所で製作された可能性も完全には捨てきれない。しかしながら、その他のタイプの石核を用いた石刃製作は同発掘区内で継続して確認でき、ナヴィフォーム型石核による石刃製作だけがこの時期に場を異にするようになったとは考えにくい。
- (14) すべての黒曜石を集積し再分配するような集落が北レヴァントに存在し、カッパドキア産の黒曜石と東アナトリア産の黒曜石と一緒に交易された可能性も考えられる。しかしその場合でも、ケルクやアカルチャイにおける両黒曜石の使い分けは確かであり、人々は、黒曜石の産地の違い、元々の交易ルートの違いを認識していたものと考えられる。したがってこの場合においても、産地からの交易過程にある、北メソポタミアや南東アナトリアの他集団との社会関係が黒曜石と共に認識されたと考えることができるであろう。

参考文献

- Arimura, M. 2003 : "Chipped Stone Artifacts," in T. Iwasaki & A. Tsuneki (eds.), 57-97.
- Arimura, M. *et al.* 2000 : "A New Neolithic Settlement in the Urfa Region: Akarçay Tepe, 1999," *Anatolia Antiqua* VIII, 227-255.
- Balkan-Athi, N. *et al.* 2004 : "Akarçay Tepe: 2001 Season," in N. Tuna *et al.* (eds.), *Salvage Project of the Archaeological Heritage of the Ilisu and Carchemish Dam Reservoirs, Activities in 2001*, Ankara, 227-250.
- Barrett, J. 1988 : "Fields of Discourse: Reconstituting a Social Archaeology," *Critique of Anthropology* 7, 5-16.
- Barrett, J. 2001 : "Agency, the Duality of Structure, and the Problem of the Archaeological Record," in I. Hodder (ed.), *Archaeological Theory Today*. Cambridge, 141-164.
- Borrell, F. forthcoming : "Chipped Stone Evolution in Southeastern Anatolia: Akarçay Tepe (7600-6800 Cal. BC)," *Proceedings of 6th Conference on PPN Chipped and Ground Stone Industries of the Fertile Crescent: Studies in Technology, Environment, Production and Society*. March 3rd-5th 2008, Manchester.
- Bourdieu, P. 1977 : *Outline of a Theory of Practice*, Cambridge.

- Cauvin, J. 2000 : *The Birth of the Gods and the Origins of Agriculture*. Cambridge.
- Cauvin, M.-C. et al. 1998 : *L'obsidienne au Proche et Moyen Orient: Du volcan à l'outil*, BAR International Series 738, Oxford.
- Chataigner, C. 1998 : "Turkish Occurrences of Obsidian and Use by Prehistoric People in the Near East from 14,000 to 6,000 BP," *Journal of Volcanology and Geothermal Research* 85, 517-537.
- Contenson, H. de 1992 : *Préhistoire de Ras Shamra: Les sondages stratigraphiques de 1955 à 1976. Ras Shamra-Ougarit VIII*, Paris.
- Copeland, L. 1981 : "The Flint Industry of the Nahr Queiq Valley," in J. Matthers (ed.), *The River Oueiq, Northern Syria and Its Catchment*. BAR International Series 98, Oxford, 81-129.
- Croucher, K. 2005 : "Queerying Near Eastern Archaeology," *World Archaeology* 37(4), 610-620.
- Giddens, A. 1984 : *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*, Cambridge.
- Gopher, A. 1994 : *Arrowheads of the Neolithic Levant. A Seriation Analysis*, DASOR 10, Winona Lake.
- Gosden, C. 1994 : *Social Being and Time*, Oxford.
- Hodder, I. 1999 : *Archaeological Process: An Introduction*, Oxford.
- Hodder, I. 2001 : "Introduction: A Review of Contemporary Theoretical Debates in Archaeology," in I. Hodder (ed.), *Archaeological Theory Today*. Cambridge, 1-13.
- Hodder, I. & C. Cessford 2004 : "Daily Practice and Social Memory at Çatalhöyük," *American Antiquity* 69(1), 17-40.
- Hole, F. 1983 : "The Jarmo Chipped Stone," in L. Braidwood et al. (eds.), *Prehistoric Archaeology along the Zagros Flanks*, Chicago, 233-284.
- Ingold, T. 2007 : "Materials against Materiality," *Archaeological Dialogues* 14(1), 1-16.
- Iwasaki, T. & A. Tsuneki 2003 : *Archaeology of the Rouj Basin. A Regional Study of the Transition from Village to City in Northwest Syria*, Vol 1, Tsukuba.
- Jones, A. 2004 : "Archaeometry and Materiality: Materials-Based Analysis in Theory and Practice," *Archaeometry* 46(3), 327-338.
- Kozłowski, S. 1999 : *The Eastern Wing of the Fertile Crescent*, BAR International Series 760, Oxford.
- Maeda, O. 2003 : "Prehistoric Obsidian Distribution in the Rouj Basin," in T. Iwasaki & A. Tsuneki (eds.), 167-184.
- Maeda, O. 2007 : "Meanings of Obsidian Exchange and Obsidian Use at Akarçay Tepe," in A. Laurence et al (eds.), *La diversité des systèmes techniques des communautés du Néolithique pré-céramique*, Antibes, 245-254.
- Mead, G. H. 1934 : *Mind, Self and Society: From the Standpoint of a Social Behaviorist*,

- Chicago.
- Meskel, L. 2008 : "The Nature of the Beast: Curating Animals and Ancestors at Çatalhöyük," *World Archaeology* 40(3), 373-389.
- Nishiaki, Y. 1990 : "Corner-Thinned Blade: A New Obsidian Tool Type from a Pottery Neolithic Mound in the Khabur Basin, Syria," *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 280, 1-14.
- Nishiaki, Y. 1993 : "Anatolian Obsidian and the Neolithic Obsidian Industries of North Syria: A Preliminary Review," in H. I. H. Prince Mikasa (ed.) *Essays on Anatolian Archaeology*, Wiesbaden, 140-159.
- Nishiaki, Y. 2000 : *Lithic Technology of Neolithic Syria*, BAR International Series 840, Oxford.
- Nishiaki, Y. 2008 : "Further Remarks on Obsidian Corner-Thinned Blades from the Northeast Syrian Neolithic," *Neo-Lithics* 2/08, 23-25.
- Shanks, M. & C. Tilley 1992: *Re-constructing Archaeology: Theory and Practice*. Second Edition, London.
- Thomas, J. 1996 : *Time, Culture and Identity*, London.
- Thomas, J. 2000 : "Introduction: the Polarities of Post-Processual Archaeology," in J. Thomas (ed.), *Interpretive Archaeology: a Reader*, London, 1-18.
- Thomas, J. 2004 : *Archaeology and Modernity*, London.
- Thomas, J. 2005 : "Comment VIII: Between 'Material Qualities' and 'Materiality'," *Archaeometry* 47(1), 198-201.
- Tilley, C. 1994 : *A Phenomenology of Landscape: Places, Paths and Monuments*, Oxford.
- Tilley, C. 2004 : *The Materiality of Stone. Explorations in Landscape Phenomenology*, Oxford.
- Tilly, C. et al. 2006 : *Handbook of Material Culture*, London.
- Trigger, B. G. 1989 : *A History of Archaeological Thought*, Cambridge.
- Tsuneki, A. et al. 1998 : "Second Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1998), Northwestern Syria," *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 19, 1-40.
- Tsuneki, A. et al. 1999 : "Third Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1999), Northwestern Syria," *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 20, 1-32.
- Tsuneki, A. et al. 2000 : "Fourth Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (2000), Northwestern Syria," *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 21, 1-36.
- 西秋良宏 1996 : 「サイド＝ブロー・ブレイド＝フレイクの技術と復元製作：シリア，テル・カシュカシヨク遺跡出土品を中心に」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』14, 1-24.
- 松谷俊雄 1974 : 「西アジアの特異な石器「サイド・ブロー・ブレイド・フレイク」について」『東洋文化』54, 1-22.
- 松谷俊雄 1981 : 「再びサイド＝ブロー・ブレイド＝フレイクについて」『東洋文化研究所紀要』88, 1-12.